

ふるさと「風」

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

第二十四号（二〇〇七年五月）

風に吹かれて（ ） 白井啓治

「疲れたら休めと野の花のいふ」

特別な理由はないのだが、最近少しお疲れ気味である。野の花のいうようにその辺にどっかと腰をおろして休みたいとは思っているが、貧乏性なのか、死んだら幾らでも休めるさ、といった思いが頭を掠め、休むのが勿体なく思え何も進んではいけないのだが、お疲れ気味に日を過ごしている。そんな所為か、目にする色々なことに気持ちが悪く、ざらついている。

一ヶ月、いやもう少し前のことだったかも知れない。「聾学校改称しないで」という新聞記事を読んだ。聾学校を聴覚特別支援学校と変更するのだという。

その根拠はというと、聾という言葉は差別的な言い方なのだという。耳が聞こえないことを日本語で「つんぼ」といい「聾」の漢字が当てられていた。日本語は差別語で漢字の音読みが差別語ではないのだと言う。そんなことを言いだしたのだろうか。しかし、そんなことをじっくり考えるまもなく、今度は「聾(ろう)」「も差別語だという。

耳が聞こえないというのは、人間的、人格的差別なのか？ そうではないだろう。「つんぼ

は差別語で「ろう」は差別語ではない。莫迦言うな、同じ漢字だろう。

今では、聾も差別語のように追いやられ、聴覚障害者が正しい表現のように言われている。障害というものは、統計学に基づいた医学用語としての定義による使い方であるが、障害を国語学的、言語学的にみれば、それこそ酷い言い方である。障害とは「妨げになるもの」「つまり「邪魔になるもの」という意味になる。障害者という言い方は「邪魔な人」という言い方なのだ。

言葉が差別語になるかならないかというのは言葉そのものにあるのではなく、その言葉の使い方、言葉を使う人の心の問題なのだ。耳が聞こえない、或いは目が見えない人に対して、それを馬鹿にして、人間的に劣っているかのよう「聾(つんぼ)」「だとか」「盲(めくら)」と使うから差別語となるので、言葉そのものには人間的、人格的差別の意味はないのである。

耳が聞こえない、目が見えないという説明の言葉を、「耳が聞こえないくせに」とか「目が見えないくせに」といった、そのことを侮辱するような使い方をすれば、耳が聞こえない、目が見えないという言葉も差別語になるのである。これは言葉の問題ではなく、使う人の心の問題

なのである。

私は「聾(つんぼ)」「唾(おつ)」「盲(めくら)」という言葉をやめた日本語であると認識し、そのまま使いたいと思っっているし、現実にもその言葉を使っている。朗読舞女優である聾の小林さんにも「つんぼ」と言うことを使いつし「おし」という言葉も使う。

耳が聞こえないという事は、医学的には障害と定義されるのであるが、私に言わせれば、聾女優である小林さんは、耳が聞こえないという才能を持って生まれてきたと認識している。だからその才能には敬意を表し、同時に絶賛している。

小林さんの朗読に舞う演技は、彼女が聾者として生まれてきたことによる感性そのものと言える。そう断言してもよい。

聾学校を改称しないで、を訴える記事の中に聾という言葉には、聾という文化がある、というように紹介されていたが、その通りだと思つ。自分達の心の腐りきつたことを棚に上げて、言葉に罪をなすりつけようとする下衆な卑猥さは到底許し難いものがある。雅な文化がドンドン消えてなくなっている責任を誰が取つてくれるのだ。

雅な言葉には雅な心のあることを忘れてはいけない。言葉という漢字は、心を口に表わして茂らすことを意味して作られた。心とは真実を意味し、口は表現の手段の総称である。

耳が聞こえないという言葉の意味の言葉に人間性だとか人格だとかを尺度するものはない。更に

言えば、人間性だとか人格というのは尺度することの出来ないものである。私達は、言葉の中に、できない尺度を与えようとすると、バベルの塔的な愚かさのあることに気付かなければならぬ。

ふるさとの歴史や文化を考える時と同様である。あくせくあくせく新しいものばかりを捜し求めていてもそこには将来の夢となるような目新しいものはないといえる。

新人賞の審査などを行う時は、現状を、既成を突き破る強さを作品に求めるのであるが、現状・既成を突き破る強さとは、目新しければ良いということではない。

言葉というのは時代とともに変化をしていくものであるが、勝手に意味を変えて新しい言葉を作っても良いというものではない。言葉というのが「心を口に茂らす」というものである以上、真実としての心を無視した変振りんな尺度を言葉に与えてはいけない。

歴史ガイドに同行して（） 兼平ちえこ

先月四月十二日(土)のこと。

「霞ヶ浦、常陸風土記を歩く」の会、主に鹿行地区の皆さんの案内に同行させて頂きました。歴史を尋ねながらの健康増進を目的とする皆さんでした。

熱心なリーダーの方が予め下見なされたて作られた「ワンポイント案内」は的確で、大変

参考になりました。そのリーダーの方の下見の時の感想を伺って、石岡市民として残念な思いにさせられました。

「歴史のある街なのに、お住まいになっていく土地の歴史を皆さんに尋ねても、わからないとの答えが多かったことに驚きました」というお話でした。

今回の見学は高浜神社を出発として、古墳のある北根本、田島、茨城、貝地方面で、約五時間のウォーキングコースです。

高浜神社。

高浜神社は、高浜県道沿い低地にあり、愛郷橋方面への信号のある丁字路の近くに鎮座しています。常陸国の国府が石岡におかれた奈良時代、都から着任された長官(国司と呼ばれた)には任務の一つに、国内の神社の管理と祭事の運営があり、国内の神社を参拝する(神拝)という行事がありました。

常陸国では、鹿島神宮が第一大社(一の宮)であったので、高浜の港から、船で鹿島まで行くことになっていました。しかし、悪天候で出航不能の時には、高浜の渚にススキ、マコモ、ヨシ等の青草で仮殿(青屋)を造り、東南方面の鹿島神宮を遥拝(遙かに離れた所から拝む)しました。今の高浜神社の社殿は後世に(創建時代必ずしも明確でない)遥拝されたあたりに造営されたものであるとされている。

拜殿が西向きは、鹿島神宮に参拝している状態であるといえます。また祭神も鹿島神宮と同じくして武甕槌命となっている。

爪書き阿弥陀堂。

爪書き阿弥陀堂は、高浜神社より旧玉里へ向うこと二、三分のところにある。

室町時代、この地に天台宗の西光院が建立された。その西光院は廃寺となり阿弥陀堂だけが現存している。堂内には本堂の千手観音像と親鸞上人が平石に爪で描いたと謂れのある阿弥陀碑が厨子に納められ安置されている。

親鸞上人が鹿島神宮参拝の折り、港のある高浜の地を通ったある日、腫れ物に苦しんでいる人に法を説き、「南無阿弥陀仏」の六字名號を授けると痛みが次第に薄くなり、とれてしまった。病人は小麦の焼餅でお礼のもてなしをし、未来の苦患も助け賜りたいと願い、上人を送り、家に帰ると庭先に阿弥陀如来像が置かれていたという由来があります。

舟塚山古墳と府中愛宕山古墳へ

阿弥陀堂より高浜神社へ戻るようにして、港町として栄えた面影を残す町並みを感じながら、常磐線方面に向う(十分位)。常磐線を横断。その時、右側一帯は常磐線の為にえぐられ、地続きだった台地の頃には、多数の古墳が点在していたそうです。間もなく上り坂。登り切ったところに、右側には民家を前にして府中愛宕山古墳。左側には舟塚山古墳、見学者の為の駐車場。ここより畑の作物や花々を見ながら三、四分で舟塚山古墳に到着。

東国(特に京都からみて関東一帯)第二位、県内では最大の前方後円墳(全長一八六メートル、国指定史跡)、茨城国造、筑紫刀禰の墳墓と

推測されている(発掘調査はされていない)。築造年代は、墳丘の形態と陪冢(ばいちょう)・近接の小さい古墳)からの出土品で五世紀中頃と推定、出土した短甲、直刀、盾等は風土記の丘の資料館に展示されている。

府中愛宕山古墳は、全長九六メートル、明治三十年に発掘調査が入り、無文素焼の壺七個発見されたと言われているが詳細は不明(県指定文化財)。築造年代は六世紀前半と考えられている。この古墳は、霞ヶ浦に舟を乗り出す形なので出舟と言われ、それに対して舟塚山古墳は入舟と呼ばれ親しまれている。両古墳上には自由に登ることが出来、筑波山連山、旧石岡地区でたった一つの山である龍神山、南東側には、霞ヶ浦(現在は木々が成長し見えない)を望む景勝地となっています。

ばらき台団地を右側にして車に気をつけながら十五分位、万福寺に到着お疲れ様でした。今回はここで一休み。来月には、万福寺、茨城廃寺跡、石岡城跡、月天宮、愛宕神社(景清塚)へと進めてまいります。

(参考資料)

石岡の地名・石岡市教育委員会

石岡の歴史と文化・石岡市歴史ボランティアの会編

ぶっくら牡丹桜 乙女盛り ちえい

遙かなる旅路

菅原茂美

我々の祖先は、いつ頃、どこから来たのだろうか? そして今我々は、子孫のために何をなすべきか。いや何をなしてはならないのか。歳のせいかな、最近こんな思いに駆られてならない。

片田舎のただのオヤジが、そんなことに頭を痛めたとして、どうなるものでもない。がしかし、祖先の歩いてきた遙かなる旅路の果てに、今日

の我々があるし、また未来もある。

折角祖先が嘗々と築きあげてきた文明が、後の世まで、永劫に続き得るのである。何かをしなければ、脆くも崩れ去ってしまうのだろうか?...とついつい物思いに耽ってしまう。世界の四大文明は、マヤやインカも含め人口過剰や自然破壊などにより、とこの昔に悉く衰退してしまつた。いずれも、人為的な環境破壊などからくる水不足、食料不足等が主因である。

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

- 5月24日 中林淳真 ギターリサイタル
- 5月25日 及川恒平/野沢享司/SONOROSA
- 6月8日 アリエール・アッセンボン
歌とギターのコンサート
- 6月22日 高橋竹童 津軽三味線のひびき
- 7月6日 吉川二郎 フラメンコ・コンサート
- 7月20日 SONOROSA ブラジリアン
ミュージック
- 8月3日 佐藤純一 ギターリサイタル
- 8月31日 北川 翔 パラライカリサイタル

ギター文化館も開設して今年で15年になります。魅力タップリの大型企画で皆様のご来場をお待ちいたします。

ギター文化館

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
0299 - 46 - 2457
FAX0299 - 46 - 2628

近年の環境破壊は、以前に輪をかけ、絶滅危惧種は増すばかり。国際自然保護連盟の発表によると、哺乳類の5分1、鳥類の8分の1、両生類の3分の1が現在、絶滅危惧種に数え挙げられているという。マクローの目で見れば、人類も所詮は自然の一部。それが他の生物を滅ぼすという事は、いわば共食いと同じ事。いずれは自分も滅びるという事。

さて旅路の始まり。およそ470万年前、アフリカで大型類人猿から枝分かれした人類の祖先（猿人・サル目ヒト科）は、ヨチヨチ歩き、直立二足歩行を始めた。

【祖先を避けば切りがないので、古代から、縄文時代に至るまでを辿ってみた】。

古生代に浅海の植物により、光合成で排出された酸素が、成層圏に高においてオゾン層となり、太陽からの有害な紫外線が地上に到達しにくくなったため、DNA破壊が減少したので、5億年前、まず植物が上陸する。次いで魚類が川を遡り、浅瀬で鰓（えら）を肺に、鱗（ひれ）を足に変え、両生類として陸上に進出（シルル紀・3.6億年前）する。両生類の一部は中生代に、爬虫類へと進化し、2億年前、爬虫類から一部は原始哺乳類へと進化する。

そして6.500万年前、恐竜が絶滅すると、哺乳類は大繁栄し、食虫目（モグラなど）の仲間から霊長類 類人猿 人類へと進化していく。大型類人猿からまずオランウータンが分岐し、770万年前ゴリラが、470万年前ボノボ・チンパンジーが共通祖先から別れて、人類誕生。

そして化石人類が次々滅亡する中、一部が「新人」となって生き残り、アフリカを出、遙かなる旅路の果て、ユーラシア大陸の東端の列島に辿り着く。それが我々の祖先である。】

さて、解放された前足（手）は、色々な物を持つたり、物を作ったりして大脳の進化を促した。人類が石器らしき物を作り始めたのが、今から、およそ250万年前。所が一つの石斧は100万年も全く姿を変えることがなかったほど、進化のテンポは超スローペースであった。

しかし、その原人達の一部は、冒険心と強い好奇心を持って、160万年前アフリカを後にし、ユーラシア大陸へと進出して、ジャワ原人（120万年前）70万年前・脳容積900cc）、北京原人（50万年前）20万年前・脳容積1000cc）、ヨーロッパでは、ネアンデルタール旧人（ホモ・サピエンス、30万年前）3万年前、脳容積1600cc）などとなったが、いずれもこの世から消え去っていった。

そして今から40万年ぐらい前、ついに人類は「火」を手に入れた。すると栄養事情が急速に改善され、一気に大脳容積を増やし、石器や色々な道具が改良された。しかしこれらの原人達も、それぞれの地で、いずれも永劫に栄えることなく、絶え果ててしまった。外へ出ず、アフリカに止まった原人達も、進化を遂げつつ、各地に放散したが、いずれも化石人類として消え去っていった。

ただしその中で、エチオピアに残った原人（ホモ・エレクトウス）の中から20万年前

DNAの一部を変換した「新種」が生き残った。これが現在、全世界に広がった我々「ホモ・サピエンス・サピエンス」の祖先である（フランスで3万年前クロマニヨン新人等）。現在地球上6.5億人の全人類は、この新人一種のみである。さてそのホモ・サピエンス・サピエンスであるが、その一部が7万年前エチオピアを出て、紅海を渡りアラビア半島に進出。一群は、インド方面へ進出し、他の群は中東を経て4万年前ヨーロッパ方面に落ち着いて、コーカソイド（白人）となった。

一方、コーカソイドと別れ、ヒマラヤ山脈の北側を廻り、3万年前アジア中央部に進出したグループは「モンゴロイド」（南側から極東経由で来た者も含む）となり、アジアに定着。更にその一部は、氷河期のためベーリング海峡は、今より90mも海水面が低かったため陸橋だったため、1.5万年前頃、シベリアからアラスカへと渡り、更に北米全域 中米 南米へと進出し、アメリカ先住民となる。

また、モンゴロイドの他の一部は、アジア大陸の東端の日本列島（2.3万年前大陸と陸続き）へと歩を進め、後の日本人の一部となる。即ち、ヒマラヤ山脈の南廻りで来た、南方系の縄文人と、3万年ぐらい前、北廻りのシベリア

サハリン 北海道経由で、マンモスハンターとして現れた北方系のモンゴロイド（アイヌの祖先）とが、日本列島に定着（日本の縄文時代・13000年前）BC4000年。ただし最近青森県でもっと古い遺跡発見し、先住民となる。

(なお、女性由来のミトコンドリアDNAと、男性由来のY染色体DNA分析研究者により、見解は多少異なり、他の流入ルートもありとする説もある。)この時、日本の縄文人の数は、約10万人といわれる。

アイヌが北方系縄文人の血を引くことは、アメリカインディアンやプリモルスキー(アムール川周辺の定着民)と共通のハプログループC両親のどちらかから受け取ったDNAのグループ)を持ち、後の弥生人等、本土人にはそれが無いことから証明される。又、南方系の縄文人由来の証拠は、日本最古の人骨化石である「港川人」(旧石器時代・18000年前)が、東南アジア、華南、沖縄、本土の順路で、ほぼ1万年ぐらい前、日本列島に辿り着いたとされる。尚、日本列島全体で、縄文人骨が数千体発見されているが、男性160cm、女性150cm、丸顔で鼻が高く、頑丈な骨格や歯をしている。生活様式は狩猟採集で、抜歯など通過儀礼が行われ、縄文末期には、原始農耕も行われていた。食べ物は、鹿など動物六〇種、鳥類15種、魚介類200種、木の実など60種が確認されているという。又、原人の日本最古の遺跡としては、60万年前の上高森遺跡(宮城県)及び、50万年前の秩父原人の生活遺跡などがある。

この『多民族集合体』が現在の日本人である。ロマンに満ちた雄大な旅であった。【日本の考古学会は、化石など証拠不足(日本は火山列島のため、硫黄など酸性火山灰により、骨はとろけ、化石として残りにくい)から議論は多いが、最近化石から、DNAの検出ができ、分子生物学的に考古学が補完され、更に現代人のDNA解析から、古代人の枝分かれ状況が立証され、以上述べた内容が現在主流を占める】

こういふ流れをみると、民族による優劣も、宗教も、イデオロギーも、まして家柄とか家系だとか、ナンセンス極まりない。日本最初の宗教改革者で、浄土宗開祖・法然上人の『貴賤貧富を問わず、万民皆平等』と説いた1175年の説法は、あまりにも卓越している。(人種差別や、新人の多元説が否定されたことから、ココソイド、モンゴロイド、ネグロイド等の用語は用いない方がよいとも言われるが、考古学の慣習から敢えて用いた。)そして、人種によるDNAの差は最大0.02%しかない。従って排他的なナショナリズム、カースト制度、宗派の相違など、人間本来の差としては、何の意味もない。そしてチンパンジーと人類とのDNAの差でさえ、2%しかない。

【人類は飢餓に怯える長かった野生時代、食べられる時に存分に食べ込む食欲中枢の遺伝子に強く支配され、栄養を蓄えた者のみが子孫を残すことに成功した。現代人が、いかに偉そうなのを言っても、メタボリックシンドロームや争いなど、DNAの呪縛から逃れる事はできない。又、何万代も続いた我々の直系祖先の中に、当たり前なことだが、一人の子孫も残すことなく、命絶えた祖先は、一人もない。】

以上が、我々の祖先の歩いてきた道程(みちのり)であるが、さてその子孫である我々は、今後どのように生きていけばよいのか?今の地球は、未来人からの預かり物とも言われる。それをしっかりと念頭に置いて、現在の為政者は、国の内外を問わず、未来の子孫達から良くやったと、感謝される舵取りをしなければならぬ。

大国のエゴイズムや、発展途上国の甘えなどから、環境汚染は無視され、経済成長至上主義が横行し、今の今、俺達さえ良ければ良い。未来のことなど、知ったこっちゃない: :では済まされない。今こそ確実に方向転換すべき時。子孫が安心して住める惑星に、全人類が取り組むべきである。そこに心しない指導者は、さつさと立ち去れ! これ以上破壊が進めば、取り返しのつかない事態となる事をしっかりと認識すべきだ。

さて話は変わるが、オゾン層は、古代から何億年もかけて築き上げられてきた生命のセーフティネットだ。これをフロンガスなどで破壊オゾンホール拡大)すれば、地上生物のDNAに傷を付け、種の絶滅につながる。現に人類は白内障などで大きなダメージを受けている。

見方によつては、無謀な物質文明の進歩は、人類滅亡への一里塚ともいえる。その他、地球温暖化、海面上昇、異常気象、ダイオキシンのカドミウム等毒物による環境汚染。それに地

球規模の凶悪な感染症などに襲われたら、それこそいちごろだ。

温暖化による危険性のうち最も怖いのは、低地の水没等のほか、マalariaを媒介するハマダラ蚊など生息域が温帯地方に拡大し、さらに黄熱病、デング熱など、熱帯伝染病の発生地域が拡大することである。

今、我々がやらなければならないことは、京都議定書あるいはそれ以上の協定書を練り直し、各国が確実にそれを守り、環境汚染をストップする事。大国のエゴイズムに屈しない事。発展途上国のわが儘を許さない事。そして決めた事は確実に実行する事。これしかない。

一方アイヌ文化は、資源を枯渇させぬ、持続可能型であり、カムイ（神）に感謝する世界観に貫かれ、無謀な収奪を禁じている。西欧の神教原理主義者達のように、徹底して己の利を求め、植民地主義で世界を凌駕した輩とは、格が違う。アイヌ文化こそ、今、世界が模範とすべき教本といえよう。そして我が国を振り返ってみても、生態系のバランスを無視した明治政府の、北海道開発における、懸賞金付き、狼の絶滅政策など悪政の見本であり、愚かな歴史の最たるものである。今、エゾシカの過剰繁殖に手を焼き、多額の駆除費用に困惑するのは、いわば天罰ともいえる。

地球は生き物である。時として牙を剥く。地盤の弱い所からマグマが大噴出し、大地を焼き尽くす。その塵灰は空を覆い、何百年間も太陽光が、地上に十分届かない。そのため、生物の

90%以上も絶滅：そんな事件は歴史上何遍も起きていた。その他、地軸のブレなどにより、極地がプラス25にもなる超温暖化や、熱帯がマイナス50にもなる全球凍結など、現実には起きた過去がある。

自然現象ならやむを得ない。しかし、知能の発達した人類が、愚行の繰り返りで、自らの首を絞める行為は、以ての外である。栄えた者は必ず滅びるのが世の常と強く認識すべきだ。

もし人類に叡智というものがあるのなら、永劫に子孫が安心して住める地球環境を整え、次世代に心から信頼されるバトンタッチをしなければならぬ。他の惑星に移住しようにも、金星はプラス460、火星はマイナス120である。

『人類に限り、滅亡などあり得ない。大方の問題は科学で解決できる。いよいよなら他の惑星に移ればよい。』こんな話は超ナンセンス。なぜなら、我々の住む銀河系だけでも、知的生物が存在しうる惑星は、計算上100万個以上もある筈という。ならば、地球人より100万年や、1000万年ぐらい文明の進んだ星から、とつづく昔に、宇宙人が地球に来ていていいはずだ。なんらかの電波信号ぐらいあってもいいはずだ。それが全くないという事は、文明が栄えすぎ、内部崩壊を起こし、他の惑星への移住などする前に、おそらく知的生物は絶滅してしまったのである。移住などそんな愚かな夢は捨て、原点に戻り、世の中のとあらゆるスピードを減速し、もっと人間らしさを取り戻し

て、心豊かな社会を構築すべきだ。産業革命以来、汚染し続けたこの地球を、今こそ、全世界が捻り鉢巻で、大掃除に取りかかるべきだ。

以上、環境汚染がもたらす危険性等、色々述べたが、年寄りの杞憂と笑うなかれ。人間の傲慢な欲望から発生する、豊かさを求めている限りなき物質文明の発展は、滅亡への道程（みちのり）と「裏腹」の関係にあることを、肝に銘じるべきである。

愛すべき子孫達のために、今こそ冷静な判断と行動が求められる。

補聴器専門店いしおか補聴器

補聴器は、聞こえれば良いというものではありません。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談下さい。

当店は、「ふるさと風の会」を応援し、会報や風の文庫などを

取り扱っております。お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2158 6

電話 0299-24-3881

正月を迎える一ヶ月半前のことであった。二人の娘が四人の子供を連れてやってきた。

「お爺ちゃんのお見舞いに行くからね」

と便りがあつてからの毎日の心の忙しさは、うれしさの悲鳴と言えた。年離れた夫婦二人の暮らしは、諦めと情性とは言いたくないが、希望を紡ぐ心の忙しさはないといえる。だから娘二人と孫四人が来ると言う知らせは、病という重大事にまで感謝をしそうなほど、暮らしという喧騒を美化してくれた。

私たちが年寄り夫婦をはじめ、皆核家族の生活である。核家族しか知らない孫達に、人間騒動体験を存分にしてもらいたいものと願い、人間騒動を期待して娘等を迎えたのであった。

人間騒動、暮らしの喧騒は、四人の孫が到着した途端に始まった。屈託ない無垢な人間の我が儘には、忘れかけていた希望を紡ぐ情態を呼び覚ましてくれた。

予想通り、幼い子等の奔流とも形容できる激しい行動や表情の全てが家の中の明かりとなり、活気を与えてくれた。その活気は年老いた夫婦からチヨット一休みを奪い去り、間断ない心身の活動を要求してきた。

それは昼だけのことではない。夜、眠ついても心身の活動を要求するのである。生き盛りと表現するのは妙かもしれないが、幼子達は生き盛りで、休むことを知らない。

我家に滞在するという一ヶ月はあつという間

に過ぎていった。今は何か置いてけぼりにされたような無言の静けさの中に、年寄り二人がぼつんとして見える。いや、そうではない。静けさにぼつんとしてるのは私だけだった。

病の主であった爺さんは、暮らしの喧騒と言う力を貰つてか、すっかりと元気になり、背筋も伸び顔色もいい。時折、孫等の写真をみながら、思い出笑いをしてる。

私はといえば、喧騒の疲れもあるが、気が脱けて、節分の頃まで外に出ることも無く、家の中をつろつろと所在無く片付けの振りをしてる始末。

ちよつと片付け始めると、部屋のあちこちから玩具が出てくる。壁に貼った絵が私を見つめているような気持ちになる。台所に立てば、背中に気配を感じ、階段から足音がするような気になつてしまふ。洗濯物を乾し始めると、喧嘩する声、泣き出す声が聞こえる気がして思わず家の中を振り返つてみたりする。これが孫達が私達に残していつてくれた宝物だ、と言い聞かせる。

生き盛りの幼子等を思い返すと、理屈で納得するよつなことには興味を示さなかつたように思ふ。

「お風呂が割れたよ！ 大水になる！」

「お便所が零れちゃうよ！」

困ったことが大喜びになるのだ。雀のお宿と呼んでいる我家は、子供等にとつては格好の遊び場であつた。

枯れ草にもぐつて隠れ、押し倒した草で焚き

火をし大歓声を上げた。氷に濡れて遊び、霜柱に滑り、みるみる洗濯物の山が出来る。

寒い朝に、庭先で死んでいた山鳩を見つけ、可愛そうだと泣き、しばらく止まらなかつたマサヨ。山鳩を埋めたてやつた近くに、今チユーリップが咲いている。

目に付いたものを全て遊び道具にしてしまふ創造力には驚かされた。積んである布団は万能の玩具であつた。キツチリとたたみ積み上げると、冒険、腕白の山だった。よじ登り、飛ぶ、滑る、転がる。山が崩れると、布団は穴倉に早代わりする。

箒、熊手、鎌、鋏、何でも自分達の玩具に変身をさせてしまふ。箒は掃くもの、熊手は掻き集めるもの。そんな固定概念なんか糞くらえの最新玩具に変えてしまつのである。

孫達が穴を掘るといつだけの遊びで掘つた穴が庭のあちこちに在る。今では雨風で随分と浅くなつてしまつたが、それでもまだ雨が降ると池を作ってくれる。

穴を掘つた時の土が、小山になつていたが、これも崩れて低くなつてしまつた。しかし、春になると盛り土を割つて草の芽が生まれてきた。孫達が置いていつた土産かなと思つて毎朝眺めている。これは雑草ではない、と自分に言い聞かせ、毎朝眺めるのを楽しみにしている。

四人の子供達が繰り広げる日課は、相手の物を欲しがる、取りに行く、そして壊す。争いの声と泣き声。取つた、取られたと追廻し、捕まえて殴りあふ。しかし、争いは直ぐに終り、泣

き声が笑い声になる。

たった四人の幼子の集団ではあるが、人間社会の縮図がそこにある。一人の自己顕示欲が集団・社会の平穏を乱す。個々の個性としての自己顕示欲が派閥を作る。

何でも自分が一番でないとい気のすまない子。

今私の引き出しには、その子が集めた鉛筆や輪ゴムなどが一杯に詰まっている。えーと鉄は、鉛筆は、

は、と思ったときは引き出しを開けてみると、必ず入っている。思わずその子に「ありがと。探し回らなくてすんだよ」とお礼を言ってしまう。

子供等は、自然の中では実に素直で、静かです。そして鋭い観察力を示す。草むらにしゃがみこむとそこには普段目に留めることのない小さな虫の大世界のあることを教えてくれた。枯葉が楽器のような音を鳴らすとも言った。幼子の無限大の観察力のことを、自分の子供達には観る事はなかった。育てることに夢中になりすぎ、何も見えていなかったと思う。改めてそのことを思い知らされる。

子供等とは毎日散歩に出かけた。一番小さな東和(とわ)はよく抱っこしてあげた。まだ言葉が出来ないので抱きしめることで会話を交わした。その分いとおしさが募ってくる。東和を抱くと必ず他の子供達も抱っこや負んぶをせがんで来た。腰の軋みを堪えて、出来る限り応えてやった。

子供達から伝わってくる感触は、自分が母親だった時のものとは全く違った。幸せを思う余

裕がある。

二、三日前のこと。予期しないドライフラワーを見つけた。散歩のときに摘んできた野草の花だった。小さな空き瓶に差していたものを忘れていて、ドライフラワーになってしまったものだ。懐かしく思わず手にすると、乾いた音が聞こえてきた。その中に、四人の幼子達の声が混じって聞こえてきた。

乾いた泥汚れは子供等の手の跡をはつきりとつけていた。そのまま大事に机の上に持ってきた。使い古した小さな机に孫達の喧騒が帰ってきた。引き出しの中も、泥汚れの小瓶のドライフラワーも、私への置き土産だ。

恋物語の地を訪ねる

小林幸枝

朗読舞劇団ことば座は、石岡市を中心とする常世の国の各地をモチーフに百の恋物語を創作し発表しています。四月の公演は通算七回になり、物語も十四話になりました。

十四話のうち旧八郷地区の風景を主題にした物語が五話あります。その他、舞い歌には場所を特定する事は直接書かれませんが、言葉の風に聴く風景の半分は旧八郷です。

ことば座を立ち上げて以来の、一番の応援者は両親でした。父は石岡生まれ石岡育ちでお婆さんは八郷の出身。石岡・八郷の事は詳しいはずなのに、公演を観てはじめて、「そんな所があったんだ」といいます。

それで先日、両親を「常世の国の恋物語」の

モチーフとなった場所に案内した。先ず、二月公演の鳴滝と、四月公演の馬滝を案内した。両親とも滝だなんていつても、大した滝ではないだろうと思っていたようですが、行ってみてビックリしたようです。そして、滝を見て、私の鳴滝の舞と、馬滝の舞の違いを納得したようでした。

峰寺山から見下ろした風景に「風賞」の物語を思い浮かべてみると、ここがまほろばの里であると納得したり、菖蒲沢の薬師堂の所にある弁天池をみて怨み節を納得したりとかしながら、石岡市の忘れていた歴史や文化の素晴らしさを再認識しました。

折角親子で出かけてきたのだから、両親が行った事のない小野小町ゆかりの北向観音やパグ博物館などにも案内し、ついでに食いしん坊の近藤さんがお気に入りのレストランで食事やお茶してきたのでした。

帰りには、旧千代田町の長興寺により、ことば座の舞台背景画として兼平ちえこさんが「常世の国の五百相」に挑戦していただいています。その発想の原点は、石彫家の鶴見さんの彫られている五百羅漢です。境内にずらりと並んだ羅漢さんを見て父も母もビックリしていました。そして、今迄石岡には何にも無いと思っていたけれど、いいものが沢山ある。今度から、公演の度にその時のモチーフとなった場所を尋ねて、舞とは別の楽しさも味わいたい、と改めてふるさとの素晴らしさを感じたのでした。

「将を射んと欲すればまず馬を射よ」という諺がある。意味としては違うように使われているようだが、弓矢の時代には馬上の武士は目標として小さく射にくいし、甲冑で固めているから当てても急所は少ない。まず、図体がデカく裸でいる馬を狙うのは理に叶っている。

徳川家康の四天王と言われた本多忠勝は関ヶ原合戦に自慢の名馬で出陣したのだが開戦早々に馬が鉄砲で撃たれてしまった。走れない名馬は枝肉にしかない。数百人の部下の多くは馬に乗っていない。忠勝ほどの猛将が歩いて戦っていたのでは格好がつかないから戦場の真ん中で石に腰掛けて一服していたところ、偶々、騎馬の家臣が見つけて馬を貸して呉れた。

鉄砲の出現で戦場における馬の役割も大きく変わってしまった。騎馬戦は日露戦争で終わった。俗に「白黒テレビ」と呼ばれた時代の人気番組に洋画の「コンバット」があった。第二次世界大戦でドイツ軍と戦ったアメリカ陸軍部隊の最前線を描いたもので、登場人物は歩兵の最小単位「分隊」のメンバーである。

「コンバット」時代の分隊編成は9名であり、1番が分隊長、2番と3番は小銃手、4番が狙撃手、5番と6番が小銃手、7番が略称でB・A・Rと呼ばれた自動小銃射手、8番が副射手兼弾薬手、9番が副分隊長の筈である。B・A・Rは簡単な機関銃で現代では小銃も弾倉式ながらB・A・R並みに進化している。

日本陸軍と違ってアメリカ軍の小銃は当時から連統射撃が出来たけれども、敵の指揮官や機関銃手などを狙い撃ちする狙撃手は特別な狙撃銃を使っていたようでスナイパースコップを装着して確実に目標を撃つ。当然、射撃の腕前が良い兵士が野球同様で4番に選ばれる。

弓矢と違って銃弾は薄い鉄を撃ち抜くから甲冑武者でも馬でも最初から狙えばよい訳で、天正3年初夏の「長篠合戦」では織田・徳川の連合軍が馬止めの柵と火縄銃を有効に使って武田勝頼の甲州騎馬軍団を壊滅させている。

「天下分け目の戦い」と言われた関ヶ原の合戦はそれから二十五年経った慶長5年(1600)9月15日、岐阜県不破郡関ヶ原の通称「青野が原」と呼ばれた狭い場所です。徳川家康の東軍約十万二千と石田三成の西軍七万五千が激突したのだが、睨み合いからでは長篠の場合のように火力だけに頼れない。挨拶代わりに双方の一斉射撃から幕が開き後は白兵戦になった。本多忠勝の馬は気の毒に流れ弾でやられたらしい。両軍で失われた兵力は相当な数に上るのであろうけれど、実に不思議なことに死傷者の数が不明のままである。隠さねばならぬ理由は?...

作戦上、一度は地元の岐阜大垣城に拠った西軍の将・石田三成は、大垣城総攻撃を装う家康の策謀にかかって岐阜を退き大阪城への移動を決意した。追撃してくる東軍を食い止めるため、関ヶ原へは東軍よりも早く到着したから各大名の軍勢は北国街道を抑えるような形で周りの山に布陣し、関ヶ原を見下ろす位置で待ち構えた。

日本陸軍草創期の陸軍大学校教官として招かれたプロイセン・ドイツの軍事専門家メッセル少佐が関ヶ原合戦の布陣図を見て即座に「西軍の勝利」と言った話は有名である。一步遅れて来た東軍は、完全に西軍包囲網の中に閉じ込められた形で関ヶ原に陣を布いた。例外としては一応、西軍に加わった形の小早川秀秋が、東軍への寝返りを予定しつつ、東軍の先鋒・福島正則の軍を側面から攻められる位置に居た。

東軍の総大将・徳川家康は現在の東海道新幹線が通る桃配山に布陣したのだが、前日は大垣城と関ヶ原の中間に当る美濃赤坂に仮宿した。関ヶ原合戦の記録は多いが地元「関ヶ原町史」によれば家康は午前四時頃に起きて湯漬の飯を食べ、直ぐに駕籠の用意をさせたらしい。

家康の気懸りは、一応は味方に付いてくれたが豊臣家ゆかりの諸大名の動向である。特に西国の雄・毛利分家を継いだ小早川秀秋の行動が怪しい。豊臣秀吉の北政所ねねの甥で、一旦は秀吉の養子にもなり豊臣家の温室で栽培された坊ちゃんである。本来は西軍の総大将に推されるべき人物ながら、どこかの官庁のように「やる気」がない。三成に豊臣家の大義名分を説教されて西軍に加わったが、自分を可愛がってくれた養母でもある叔母さんからは家康に従えと言われている。面倒になって東でも西でも場合によっては南北でも良いとさえ思っている。

家康の意向を受けた黒田長政が確認の使者を入れ東軍への味方を回答したが信用しにくい。当日の関ヶ原は小雨から深い朝霧がたちこめて

いたと言われる。西軍は霧が晴れた午前八時頃から最前線で小競り合いを始めた。固く護る西軍の陣へ東軍が強引に殴り込むことになるからどうしても東軍不利である。

家康はイライラすると爪を噛む癖があったと伝えられている。本陣の中で床几から腰をあげては爪を齧る。当然ながら家康には影武者が付いていた。背格好、顔形、声まで似ているが影武者は勤務中だから不謹慎に爪など噛まない。

そのうちに苛立った家康は馬に跨った。自分から小早川の陣営に駆け込むような勢いである。

その時、至近距離から「将を射ん」と馬を避けて飛び来たった一発の銃弾が家康の心臓にぶつかった。幾ら丈夫な家康でも心臓が動かないと立ち上がれない。傍らに残された影武者が慌てて爪を噛んだが、既に手遅れであった。

さて、それからが大騒ぎとは言っても総大将が居ないと分つたら東軍が総崩れになることは必定である。偶々、借り物の馬で一暴れした本多忠勝が、新規採用の馬を取り戻った序でに本陣へ寄って家康の傍に居た。咄嗟に影武者と図つて影武者を徳川家康本人と認定し爪を噛んでいた人物と入れ替えさせた。

傍には小姓が二人居ただけで、こいつらを始末すれば秘密は洩れない。ところが、この影武者が本物以上に優れた人物で、血相変えた忠勝を押し留め、いくらかの口止め料で済ませた。そして次々と降りかかる難問題を見事に解決してゆくのだが、幾ら似ていても本物とソックリさんとは多少の違いがある。替え玉が一番に心

配したのが「お梶の方」の存在である。

お梶の方は太田道灌の子孫とされ、水戸光圀や水戸系初代府中（石岡）藩主・松平頼隆らの祖母に当る聡明で勇気のある女性である。大勢の側室の中で唯一人、江戸から騎馬で家康に従い美濃赤坂の飯屋まで来ていた。戦場まで馬で出かけて来かねない。替え玉と忠勝は、真つ先にお梶の方の足止めを図った。

その小細工がお梶の方に疑惑を抱かせることになり、場合によってはお梶の方を斬ろうとする忠勝を宥めて、替え玉が最初にお梶の方に家康死亡の事実を告げることになる。そして物語は延々と続いてゆく。これは平成元年に新潮社から出版された「影武者 徳川家康」という小説である。著者は隆（りゅう）慶一郎という。東大出、フランス文学者あがりの作家らしい。

この小説のことを知らなかった私は「ふるさと」「風」と同人の菅原茂美さんに教えて頂き、本をお借りして上・中・下3巻を読み通した。菅原さんは民族資料館前にある石岡市指定史跡「風間阿弥陀」ゆかりの風間一族である。

「徳川家康が影武者だった」とする小説の根拠は、明治35年4月18日に民友社が出版した「史疑徳川家康事蹟（村岡素一郎著）」という本であり、徳川幕府の儒者だった林羅山の著、駿府政要録」に根拠をとっているとか。なお出版元の民友社は、明治から昭和にかけて言論界で特異な存在感を示した徳富蘇峰（不如帰）ホトトギスを著した徳富蘆花の兄）の会社である。確か昔の石岡駅には、どついつ縁が知らないが、

蘇峰の書が掲げてあったような気がする……

「影武者 徳川家康」は平成の始め頃に発表され後書きには「史疑徳川家康事蹟」や著者の村岡素一郎のことも書いてあるのだが、あれこれ調べると「影武者 徳川家康」が出版される以前にも「史疑徳川家康事蹟」は何度も歴史界の話題になったようである。

この著書に序文を書いている「重野安繹（しげのやすつぐ）」と言う人物は、明治初期に帝大教授やら元老院議員などを歴任した国史界の大物であるが歴史上の出来事、特に南北朝時代の楠木正成・正行父子による「櫻井の駅の別れ」などを「無かった」と主張したことから「抹殺博士」と呼ばれたそう、日本の古代史に多くの疑問が提起されている現代にこそ生きていて貰いたかったと私は思う。

著者の村岡素一郎は、関ヶ原合戦で小早川秀秋を東軍に勧誘した黒田長政の子孫が治める福岡藩の藩医の子で、明治新政府の中級官吏として働いていた。幾つかの歴史専門誌にその人物が紹介されているが「史疑徳川家康事蹟」をきっかけとした動機は「明治新政府」と称する薩摩・長州・土佐など有力藩閥出身者の独裁的な政治指向に対する反発だと考えられている。

そうであれば民主主義思想の先駆者のようなものだが明治という時代が悪かった。著書の内容は、徳川家康という個人に贖物が居たかどうかの問題ながら、この説が広まると時代に君臨している権力者の尊厳が傷つく虞れがある……

徳川一族が本を買い占めたという説もあるよ

うだが、どうも国家権力が動いたらしく、いつの間にか「史疑徳川家康事蹟」が本屋さんから消えてしまったとか、それでも何部かは闇ルートに流れたものがあつた筈で、その一冊が村岡素一郎に渡つたと推定できる。

「徳川家康替え玉説」は幾つかあり、当然否定論もある。一般的と言つのも変だが替え玉論の大筋は、家康が名乗つたとされる「世良田二郎三郎元信が実は徳川家康ではなかつた」というもので、小説「影武者 徳川家康」も関ヶ原で家康と二郎三郎が入れ替る話である。

確かに戦国時代の武將は影武者を連れていたであろう。武田信玄などは自分が病気で助からないと分つた時点で、息子の勝頼や重臣に遺言して死を三年間伏せている。当然、その間は影武者が勤務していた。それでも信玄の死は洩れている。この小説のように影武者が生き残つて

本物に成り切るのは無理なようにも思つが。

年の為に「影武者 徳川家康」の冒頭の場面を思い出してみると、慶長5年9月15日の早朝、小雨のような深い霧の中を美濃赤坂から関ヶ原へ向かう東軍の列に「使番(伝令)」という重要な任務を与えられた野々村四郎右衛門がいた。下僕が馬を曳いていたのだが、何時の間にか、甲州武田の隠密だつた流れ忍者と入れ替わつていて、四郎右衛門を隊列から離し林の中で刺し殺した。忍者はその場で四郎右衛門の衣服を奪い本人に成り済まして隊列に戻る。

合戦が始まり戦況に苛立つた家康が馬で様子

を見に行こうとした時に、偽者の野々村四郎右衛門が家康の馬前へ乗りかけた。家康は「無礼者！」と一喝して太刀を抜き斬り付けた。四郎右衛門は驚いて退散した。それから間もなく陣所近くの草むらに潜んでいた男が鉄砲で家康を撃つた。それが流れ忍者で、智將の誉れ高い西軍の参謀・島左近に命じられた行動であつた。

この場面は徳川家康の侍医だつた板坂卜齋(いたさかぼくさい)が著した「慶長記」という見聞録などに載っている。人物往来社刊の史料によれば、「十五日、小細雨ふり、山あひなれば、霧ふかくして十五間先は見へす。(中略)鉄砲のなるをとほ、霧の内にておひたし。お馬廻りわかきもの共いさみ我も人も馬を乗り廻し、御そなへしかとさたまらざる時、野々村四郎右衛門と申もの、家康公の御馬へのりかけ候。御腹立候て、刀をぬき御はらいなされ候へは、野々村には御刀あたらす。御刀ぬかせられ候におとろぎ野々村は乗てにければ、御腹立のあまり、御そはのもの門名長三郎と申御小姓立のものさしものを、さし物筒のきわよりきらせられ候へ共、身にはあたらす。(中略)後日に野々村にたたらせらるゝ事もなし」とある。

侍医だから影武者同様に家康の身近に居た訳であり、そうでなければ細かい描写は出来ない。慶長記の記述を素直に解釈すれば、御使番の野々村四郎右衛門は、本来ならば少し下がって陣幕の外に控えていなければならぬのだが、「お馬廻り(家康警護)の若い武士たちが勇み立つて誰も彼も馬を乗り回し、肝心の備えが

確りしない」と状態だつたから、御使番の野々村も調子に乗つてうっかりと家康の馬前を横切ることになつてしまつたのである。後日に野々村にたたらせらるゝこともなしは「お咎めなし」のことである。

豊臣秀吉恩顧の大名たちが石田三成を毛嫌いしていることだけを頼りにして関ヶ原の合戦に臨んだ家康が敵の陣形を見てイライラ、ハラハラしていた様子が窺える。別行動で中仙道を進んで来る徳川秀忠の軍勢は何処にいるかも分らない。総大将がそのような状態だから、護つている若い武士たちも落ち着いてはられない。さて、そうなると折角「これは真実か?」と思ひ込んだ「影武者 徳川家康・第一巻」までがフィクションの可能性も出てくる訳である。冷静に考えると、後から鉄砲で撃つて本物の家康を仕留める(それだけの腕がある)のだからわざわざ野々村四郎右衛門に化けて家康の近くまでノコノコと出て行く必要が無い。

さらに如何に戦場でも、影武者を置くほど万全を期しているのに、家康の回りに影武者と小姓数名と偶然に立ち寄つた本多忠勝しか居なかつたというのが不自然である。家康の陣構図を何処かで見だが、旗本が幾重にも取り巻いていて火縄銃で易々と狙い撃ちは出来そうにない。もう少し、小説の世界に入つて行くと、徳川家康の狙撃に成功した流れ忍者と暗殺指令を出した島左近(石田三成が自分の所領の半分を削つてまで採用したほどの人物)とは、不思議な因縁で家康の影武者と結び付くのである。そし

て影武者の世良田二郎三郎元信を探し出してきて家康に付けたのが、徳川幕府の黒幕と言われた本多佐渡守正信になっている。正信は二代將軍となった秀忠に付いて家康からの指令を伝える役目をしていたようである。

この壮大にして怪奇な物語、つまり「隆慶一郎著、影武者 徳川家康」を真実とするかフィクションとするかは意見の分かれるところだと思ふ。それ程に関ヶ原合戦以後の家康、秀忠父子の行動が、実録とされる史料に基づきリアルに描かれているのである。

先にも述べたが、私は史実かと思つた第一巻の「家康暗殺」に至る間の犯人の行動に矛盾を感じた（慶長記などを見直して）ので、二巻・三巻にあつた疑問と合わせて、これは飽く迄も「実に良く出来た小説」であると言いたい。

第三巻は、駿府城の家康（大御所）と江戸城の秀忠（將軍）の暗闘が中心である。家康には関ヶ原合戦で行方不明とされる島左近と朝鮮半島から来た忍者集団が付き、秀忠は柳生一門を駆使して家康と影武者の世良田二郎三郎を抹殺しようとして、あらゆる手段で襲わせる。

貧しい庶民出身の二郎三郎は、本多忠勝が秘密を守るために家康死亡時に近侍していた小姓を斬ろうとするのを留め、また、お梶の方の暗殺も止めさせた。言うならば人情のある人物に描かれている。しかし、家康が隠居してからの行動を記録した「駿府記」（著者は林羅山とされる）を見ると権力者に有り勝ちな冷酷さが出ていて、これこそが本物の家康に思える。

慶長十六年辛亥 八月

十三日 今朝浅間に出御、鉄炮を放たしめ給う。（中略）馬の刻、鷹あり。前殿の檜上に留る。自ら鉄炮を放たしめ給う。三度共中りて、一鷹すなわち落つ。一鷹足を射切りて飛去すと云々。

其の遠さ五十間なりと云々。…
家康は鷹狩りを頻繁に行つて鶴を獲物にして食用に供しているが、鷹を食べたとは思えず無益な殺生ではないか。

廿日 江戸より御使（秀忠の）として井上九郎正就着府、生鮭を進ぜらる。すなわち御料理となす。

柳生による家康暗殺の最も容易な手段は毒殺である。小説でも次々と暗殺の手が伸びて影武者も用心に用心を重ねていたのに、秀忠が届けて寄こした生の鮭を安心して食べる訳がない。記録では鮭が他の大名からも届けられている。

十二月

朔日（一日） 府中近辺御鷹野、田圃水を湛つる故、御気色あり。彦坂九兵衛、畔柳寿学、松下浄慶に仰せて、彼の田の名主十余人これを禁獄さる…

自分の鷹狩りに都合が悪く、田圃に水が張られていたとして、現地の名主達を牢に入れる…影武者・二郎三郎ならば、そのような横暴はしない。また、狩場は暗殺に格好の場所であるのに実に頻繁に鷹狩りの行われた記録がある。

慶長十八年癸丑 十月

廿七日 松平右衛門に仰せつけられ、岩

付（槻）に於て、白鳥三十三これを取ると云々。

多くの白鳥を殺してどうするのか？

慶長廿年（元和元年） 極月（十二月）

六日 稲毛出御。（この時、家康は江戸城に居て鷹狩りしながら駿府城へ戻るのである）辰の刻（午前八時過ぎ）より甚だ雪降る。御供の匹夫（身分の低い者）、路次に於て五、六輩凍死。未の刻（午後一時過ぎ）中原着御と云々…

朝から雪模様で厳しい寒さの中、狩を続けたために素足、軽装でジツと待っている供が凍死したというのである。然も、其の人数が正確には分らない。氷雪以下の冷酷さである。

繰り返して言うが、これは影武者・世良田二郎三郎元信の所業ではない。天下人となつた真正銘の徳川家康なればこそその所業であつたと考えざるを得ない。このことから推察して家康は関ヶ原合戦で死んで居なかつた。

そもそも戦国時代の、正確には南北朝時代辺りから各地に現れた「武將」は、石岡に墓所がある常陸大掾（だいじょう）氏やら東北に居た佐竹氏などと違つて家系が古くない。地域の土豪から成長し、下克上を実践して登場してきたから官職や歴史的格付けが欲しい。所詮、人類の祖先は「猿」なのだから自分を主張すれば良いのに、くだらない「イエガラ」などに拘る。徳川氏もその例に洩れず「新田源氏」を主張しているように見えるが正直なところもある。

現在では聞かれなくなったが、講談とか浪曲

が流行った時代に人気のあった出し物で「一心太助」というのがあった。義侠心の強い魚屋で太助の後ろ楯になっていたのが大久保彦左衛門という老旗本である。この人は実在の人物で禄高三千石、県内の鹿島郡にも少し領地があったというが、どの辺りであろう。長篠合戦の前哨戦である「鷲の巢文殊山の合戦に初陣」が自慢であったが、平和が続くと武闘派の侍は出番が無くなり戦歴の割りには禄高も低い。

徳川家の成り立ちと自分の経歴などを子孫に伝える目的から、この人が「三河物語」という本を書いている。不平不満からでは無いとしても、見方によっては暴露本にもなる。

「三河物語」には南北朝時代に後醍醐天皇に忠節を尽くした新田一族が南朝の衰微、新田家の没落により郷里である上野国仁田(新田)郡徳河の里に隠れ住み、やがて足利一族の圧迫から十代ばかりは此処かしこと流浪していたと書かれている。そして諸国流浪中に時宗(じしゆ)の僧となつて徳阿彌と名乗り三河国酒井の郷に来て、地元のある娘さんを妊娠させた。さすがは家康の祖先である。

逃げるに逃げられず、郷に留まっているときに近隣の松平郷に居た太郎左衛門という資産家があるが、そこへ、先に生まれた男の子が「父ちゃん!」と尋ねてきたが「幾ら先に生まれても、お前をこの家の跡継ぎには出来ない」と言つて末代までの家来にしたという。

この徳阿彌が松平太郎左衛門親氏と名乗り、忽ちに近隣の領地十七箇所を支配したのだが、治世では並ぶ人無く慈悲深く、民百姓、乞食、非人に至るまで哀れを加えさせたもうとある。勸練れば、その筋の集団の親玉だった人物が土着して武士と称したと言えないこともない。

は出自にそれ程は拘つておらず、何処かの流れる者が先祖だったことを認めていた。素性の怪しいことを影武者の所為にする必要は無かった。

三河物語と三河後風土記、この二つから徳川家康の祖先の素性を辿つてゆくと概略は次のようになる。まず八幡太郎義家の三男に式部大輔

して一説には徳川家康の守役だった平岩親吉が編纂したとも言われる(否定論もある)、「三河後風土記」にも似たような記述がある。家康本人

いた。都で右大臣と喧嘩して下野国へ流され、土着して足利、新田両氏の祖となった。

ギター文化館発：ことば座第八回定期公演

「常世の国の恋物語百」

第15話「風の姿(異説三味塚古墳)」

6月15日(日曜日) 13:30会場 14:00開演

第15話「風の姿(異説三味塚古墳)」

「三味塚古墳は、古墳ではなく、舞い塚だった!!」

昔、黒坂命と建借間命が茨城と行方の両地から挟み討つ様に進攻し、霞ヶ浦湖岸とその周辺の森に暮らす原住民を無差別大量殺戮を行なった。園部川河口に暮らす舞の民と呼ばれる人々を進攻の手から救ったのは、小型の野生馬を能く使う、奈女比古という若者であった。

ことば座6月公演は、行方市の三味塚古墳をモチーフに、近藤治平が大胆な発想の基に書下ろした異説の舞い物語。ふるさとへの熱い想いを、万葉集の恋歌を引用しながら夕景の霞ヶ浦に流れる風の姿として、小林幸枝の朗読舞と野口喜広のオカリナ、そして兼平ちえこのことば絵で謳いあげていきます。

前売チケットのご予約は、ギター文化館(0299-46-2457)へ。

ことば座事務局 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

0299-24-2063 Fax 0299-23-0150

義国の長男・義重が新田庄を継ぎ、次男の義康が足利庄を継いだ。源頼朝が平家打倒の旗揚げをした時に新田氏は出遅れてしまった。義重の子(三男・四男)が徳川四郎(又二郎)・義季と言ひ、遅れ馳せながら頼朝に従って新田庄のうち世良田郷の徳川邑(むら)を領地とした。

義季の子が新田(世良田)孫四郎頼氏で、北条氏に仕えて將軍・宗尊親王の詰番衆となる。頼氏の子・教氏が世良田(徳川)次郎と名乗る。その後、世良田又次郎家時、その子・世良田次郎満義は新田義貞に従って各地を転戦したが、義貞が敗れて足利尊氏の天下になったので、世良田一族は分散して新田、徳川、世良田の村々に隠れ住むことになった。

世良田弥次郎満義の子は、徳川次郎政義と世良田三郎義秋の二人であるが、二人とも南朝方の残党として足利軍と戦っていたようで、どちらが徳川家康の祖先になるのか両説がある。

世良田義秋は信濃で早く戦死し、政義も永享5年(1433)に戦死するのだが、親季という子供が居り一旦は敵に捕まった後、脱走して三河の国へ来た、とする説もある。取り敢えずは故郷の世良田へ逃れたと思ふ。親季の子は有親という。一方、義秋にも政親という子が居り、尾張国へ逃れる。政親の子は親氏である。

なにしろ戦乱の時代で、負けてばかりいた新田一族であるから家系が曖昧になるのも止むを得ない。親氏、有親、親季この3人の代で一族の消息が分り難くなっている。

石岡にいた桓武平氏の元祖である豪族・大掾

氏が衰退する切っ掛けとなった。上杉禅秀の乱(鎌倉公方・足利持氏の専横に対して執事の上杉氏憲が起した反乱)には、世良田の里に居た徳川一族も加担したようで、結局、禅秀方が負けたために残党の詮議が厳しく一族は世良田に居られず諸国を流浪したのである。

彼らは便宜上から当時、一定の地に留まらず念仏を唱えつつ諸国を回っていた一遍房智真の宗派「時宗」の僧となつて身分を隠した。有親は長阿彌、親氏は徳阿彌と名乗つたよつである。徳阿彌らは時宗の本拠がある藤沢に来て僧となる手続きを終えてから一旦は知人の多い信州に回り、そこから三河の国に辿り着いた。

三河物語により先に述べたように徳阿彌一人か連れが居たのか分らぬが、ともかく三河国松平郷に流れて来た坊さんが、念仏で娘たちを騙して村に居ついてしまった。元は武士の端くれだから戦が強、忽ち近隣を切り従える豪族に申し上がった。直系は次のようになる。

松平太郎左衛門親氏(松平氏中興の祖)

三河守泰親(都の兵乱を避けて来た公家を助けたので三河国目代となる)

河内守信光(二郎三郎、安祥城と岡崎城)

右京亮親忠(二郎三郎)

出雲守長親(二郎三郎)

蔵人信忠(二郎三郎、家臣離反、岡崎城失つ)

二郎三郎清康(十三歳で継ぐ、家臣を回復)

二郎三郎広忠(十歳で継ぐ、今川氏に服従)

徳川二郎三郎元信(元康・家康)六歳で人質

として今川へ送られる途中、織田に奪われる。八歳で父が家臣に殺害され、今川の人質となる。

これが三河国での徳川家系であるが清和源氏新田の一族と言う松平親氏こと僧・徳阿彌の素性は疑問だとされている。つまり松平氏の祖である人物の素性が定かでないという説から幼少時代に人質暮らしが長かった家康の替え玉説が言われるようになったことも考えられる。

小説「影武者 徳川家康」の主人公、つまり流浪の民出身の影武者・世良田二郎三郎元信は徳阿彌こと松平親氏の子孫である徳川二郎三郎元信なので、そうなるかと暗殺された徳川家康の素性はどうか、小説ではそのことに触れていない。関ヶ原合戦に十万の軍勢を動員できた人物が「どの馬の骨」だから分らぬままに消されて影武者の系統だけ伝わるのも不可解なことで、武田信玄は喪を秘した三年の後に僧侶百人という盛大な葬儀が行われている。

三河後風土記とか難波戦記に記録された徳川家康は、鉄砲が撃ち込まれる前線を平気で視察している。近くの土俵に弾丸が当たったのを見て「これは木製の銃だ」と判断する余裕もある。

その反面、自分の周りは何時にも充分な備えを欠かさない慎重さがあった。関ヶ原の合戦に出陣した徳川軍は三万とされるが、その大部分が戦闘要員ではなく家康の本陣を護る人員だった。

長い人質生活や多くの合戦で苦しい修羅場を生きて抜いてきた知恵がそうさせたのである。

そもそも徳川家康になぜ暗殺説や替え玉説があったか?、長かった人質暮らし以外にその理

由を推測してみると、第一に思い当るのが父親と祖父との横死である。家康が生まれた頃の三河国岡崎・安城地方は、新興勢力の織田氏と駿河の今川氏との対立抗争の場であり、小豪族は身内同士、主従の間でも意見の相違が生じ、時に裏切りが行われた。家康の祖父・安城三郎清康は織田氏を攻める陣中で家臣の阿部弥七郎に殺され、父の広忠も酒癖の悪い家臣の岩松八弥に斬られている。どちらの場合も斬れ過ぎて妖刀と言われた「村正」が使われた。

織田信長の一族で家康に尻尾を振っていた「織田有楽斎」（有楽町に名が残る）が関ヶ原合戦で息子と一緒に敵将の首を取って自慢げに家康に見せた。その時に使った槍が兜を貫いても刃こぼれもしなかった。家康が手に取って見たときに家康の手が少し斬れた。家康は「この槍は村正ではないか？」と訊ねる。「仰せのとおり」と答えると、黙って返したが、有楽斎が気にして近習に理由を聞き、その場で槍を折って忠誠心を示したという話が残されている。

家康自身は三歳で伯父の裏切りから母親に別れ父方祖父の妹に養育された。その上、六歳で今川方へ人質に出され、その途中で地元の武將に奪われ織田方へ転売されている。然も、その後には人質交換で今川方へ行かされた。祖父から三代に亘って謎が出来ても不思議ではない。

徳川秀忠に重臣の榊原康政らを付けた三万の徳川本隊が中仙道を関が原へ急いだが合戦に間に合わなかった。止む無く本陣守備の三万から一部を攻撃要員に充てたが、それでも有り余

る将兵が家康一人を護るために準備されていた小説のとおり、敢えて狙撃があつたとして撃たれたのは「家康ではなかった」ことが考えられるのではないだろうか。

慎重な家康は、かねて石田三成が自分の暗殺を企むことを予測して影武者を置き、さらに、本物の徳川家康は奇立つと爪を噛む癖がある」という噂を流し、影武者に爪を噛ませていた。

慶長5年9月15日、霧が晴れた関ヶ原の陣中で何者かに狙撃されて命を落とした徳川家康は、実に良く似た影武者だった。本多忠勝は直ちに影武者の死体を埋めて隠した。東軍の本陣では何事も無かつたように正真正銘の家康が次々と戦況を報告に来る武將に應對していた。

ふるさと風の文庫

二年間にわたって、ふるさと風に発表してきた小文をまとめた小冊子が出来上がりました。ギター文化館/石岡補聴器にて販売しています。

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の歴史エッセイ

ふるさと「風にたずねて」(〃 / 〃)
(二冊組：1000円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を咳いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」(定価500円)

小林 幸枝 「風に舞う」(定価500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

ふるさと「風のことば」(定価500円)

ふるさと風の会：編集事務局

0299-24-2063 (白井啓治方)

石の上にも三年

ギター文化館「ふるさと風展」

六月十日、六月十五日

ふるさと表現紙「風」が、今月の五月号で丸二年・二十四号となりました。六月からは三年目に入ります。

石の上にも三年。冷え切った石の上でしたが痔を患うこともなく、少しですが温まり始め、座り心地にも慣れてきました。

悪口だつて大声で言えば自慢になるんだよ、と手前勝手な理屈を掲げ、兎に角何でもいいから声を出して発し続けましょうと、月々の原稿締め切りに追われながら丸二年の二十四号を迎え、大したものだと自らを褒めています。

毎月手作りに僅か五百部の会報を出してきましたが、市外、県外の方々から応援や励ましの声をいただき、全員「今回はパスします」の言葉を出さずやってこれた事は、自慢してもいいだろうと思っています。

三年目を迎えるに当たって、ギター文化館様の応援協力をいただき、六月十日から十五日まで、ふるさと風の展を行なうこととなりました。

ふるさと風の前身である「ふるさとルネサンス」及び、この集りのはじめとなった「ふるさとルネサンス塾」からの歩みを振り返る展示と、対話を多くの皆様と持てたらと願っております。兼平ちえこの「ふるさと風のことば絵」こと

ば座での舞台背景画「常世の国の五百相」に囲まれて、私のふるさと談義の花を咲かせられたらと思っております。

また、ギター文化館所蔵の、世界のギター名器の見学をお楽しみいただきたいと思います。ふるさと風の展は、ギター文化館様のご好意で、通常の見学料三〇〇円（コピー付き）で入館いただけます。

開催期間中は、運がよければギター文化館のボランティア演奏者の演奏やことば座の女優小林幸枝の指導による一行文を手話で舞うアトラクションなどをお楽しみいただけます。

なお六月十五日は、ことば座の定期公演が午後一時から行なわれますので、風の会展は午前中で終了させていただきます。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声（音）を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一摘みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465 0299-55-4411

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

編集事務局

T 315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治)